

「空手道で一番苦しかったこと」

平成 28 年 9 月 19 日

西東京本部 つつじヶ丘支部 吉川 保史

私が月心会に入会する前はキックボクシングやブラジリアン柔術などの色々な格闘技をやってきました。

そんな私にとって、空手等のポイント制の武道競技は未知の存在でした。

まず打撃で技ありや一本を取る方法が理解できませんでした。

私が空手を始めたのは、当時通っていた日本拳法の練習場が遠くてあんまり行けず、家族が近所の空手教室に通っていたので、そこに交せてもらって練習不足を解消してやろうという考えでした。

日本拳法の時に初めてポイント制のルールに触れましたが、打撃で一本を取るということを全く理解していなくて、間合いはキックボクシングに近いので練習では違和感なく打ち合っていました。試合になるとポイントを取れず、後は寝技でなんとかしていました。

空手を始めた後も頭では理解していたつもりでも本質は分かっていませんでした。

試合(寸止めルール)に出た時も自分では何度もポイントを奪っているつもりなのに、審判には全然取ってもらえず、混乱して対戦相手をブン殴って反則を取られる等ヒドいものでした。

しかしその頃出稽古で出会った伝統派空手の強豪と組手したことによって空手の強さ、速さに衝撃を受け、理解し難いモノを理解したい好奇心と、その強さを吸収したい気持ちで、より一層空手に興味を持ちました。

家族で通っていた空手教室が閉鎖になり、自宅の近所で空手を出来る所を探し、入会した所は伝統派空手では一般的な寸止めルールではなく、月心会と同じく強打が許されるルールでした。

そこは組手は春から夏にかけてしかやってないので、半年間待ち、やっと組手をやる日がやってきました。

最初の相手はのび太君がそのまま大人になったような人だったし、その数日前に私は友人との練習会で某総合格闘技系空手の有力選手相手にキックルールで一步も引かないバチバチの打ち合いをしていたので、楽勝だと思っていました。

しかし始まってみると、のび太君のような人相手に全然うまく動けないし、殴ってもへなちょこパンチしか出せないし、まるでのび太 VS のび太のような情けない組手をしてしまいました。

同じ突き蹴りで闘う競技なのに何がそんなに違うのか分からず愕然となりました。

そして改めて私は空手の間合いとルールが苦手で下手なんだと思い知らされました。

そこで数をこなして間合いとルールに慣れるようにすると、その流派ならではの非常

に薄いグローブで打ち合うことに順応できるように硬いサンドバッグを殴りに出かけたりしました。

それから2ヶ月近くたった頃、霧が晴れたように間合いの感覚が合うようになりました。

のび太君には楽勝できるようになり、大会で活躍している他の道場生からもポイントを奪えるようになりました。

しかしそこにも落とし穴がありました。

今までカスリもしなかったウサを晴らすように思いっきり放った上段回し蹴りが相手の顔面を捉え一本取ったんですが…。

- ・相手のかぶっていた面はキャッチャー面のような硬いやつだった
- ・サポーターはしてはいけない流派だった
- ・足には古傷があった

…ということで、私の足はブツ壊れてしまいました。

普通に歩けるようになるまで3ヶ月かかり、小走りができるのにも半年以上かかり、その空手もやめてしまいました。

やっと苦手な空手の間合いとルールを克服したと思ったのに、日常生活や仕事にも支障をきたした状態に長期間陥ったこの頃が空手をやって一番苦しい時期でした。

10ヶ月が経ち、常に足に固定サポーターを着けて生活してたおかげで、また空手をやれるくらいに回復してきたので空手道場を探し始め、見つけたのが月心会でした。

練習の雰囲気や、フックや下段回し蹴りが使用OKな所が気に入って入会を決めました。

しかし足を怪我をする直前の間合いの感覚はブランクのせいか無くしてしまい、月心会でのデビュー戦では蹴りを空振りして豪快にコケてしまって、背中に酷い打撲を負ってしまいました。

それで遠い間合いからでも届く蹴りを練習していたら今度は膝を痛めてしまい、10ヶ月くらいは膝を深く曲げられずに苦勞しました。

これが月心会での一番苦しかったことです。

しかし苦手な間合いとルールを試行錯誤しながら克服していく課程が楽しいし、空手の型を覚えたりするのも好きなので、基本的に苦しいとか嫌だということはありません。

これからは後進の方々に恥ずかしくないように、一つ一つの技術を正確に極め、みんなに教えていけるよう頑張りたいと思います。